Bulletin of the School of Education,
Nagoya University (Educational Psychology)
1993, Vol. 40, 99 − 125.

青年期における自己意識の発達に関する研究（II）

── 重要な他者からの評価との関連 ──

平　石　賢　二

I．問題と目的

従来，青年心理学においては，自我の発見（Spranger, 1955）や自我同一性の達成（Erikson, 1959；Erikson, 1963）などのテーマが問題にされ，青年期は自己確立，自己形成の時期であることが強調されてきた。加藤（1978）は，青年期の特質を自己意識の転換期，再構成期に入ることであると述べている。

また，わが国における戦後の青年心理研究を概観しても，自我・自己の研究は，最も盛んに研究されてきた領域のひとつであり，重要な研究課題であるとみなすことができる（久世・平石・辻井，1990）。

この自我や自己の概念は，ふるくより様々な立場によって定義され研究が進められている（Allport, 1943；北村，1977；Wylie, 1979；Rosenberg, 1979）。なかでも，現象学的自己論と呼ばれる立場（Lecky, 1945；Snygg & Combs, 1949；Rogers, 1951；Rogers & Dymond, 1954）では，自己意識や自己概念は，「個人の行動を規定する内的な準拠枠」であり，適応や心理学的健康の指標としてみなされた。そして，わが国においてもこの視点から数多くの研究がなされてきた（長島・藤原・原野・斎藤・堀，1966；長島他，1967；斎藤，1959；椎名，1966，平石，1987；平石，1990a）。

そして，Wylie（1979）のレビューに見られるとおり，膨大な自己意識に関する研究が積み重ねられてきた。これら自己意識に関する研究について，Rosenberg（1986）は，2つの視点から整理している。1番目は，自己意識の内容であり，「人は自分自身について何を見るか」といった側面である。2番目は，自己意識の次元であり，自己への態度の望ましさ（self-esteem）や安定性（stability），顕著さ（self-consciousness）などの次元を含んでいる。また，Shavelson, Hubner, & Stanton（1976）も，従来の自己意識研究の中では概念的にも実証的にも自己記述（self-description）と自己評価（self-evaluation）との区別がなされておらず，両者が相互的に使用されていたことを批判し，このような分類の重要性について触れている。

本研究では，このRosenberg（1986）の分類的視点に従い，両者の概念的な区別を考慮しながら，自己意識の次元，とりわけ自己への態度の望ましさ（自己肯定性次元）と自己の安定性（自己安定性次元）に焦点をあてていくことにする。

ところで，青年期において自己意識はどの時期に，どのように発達し形成されていくのであろうか。青年期における自己肯定性次元，すなわちself-esteemの発達に関する研究では，多くの異なった研究結果が示されてきた。Wylie（1979）は多くの研究のレビューの中でself-esteemと年齢との間には一貫した関係が例証され得なかったと結論づけている。しかし他方で，McCarthy & Hoge（1982）は，縦断的研究においてはある程度一貫して加齢に伴いself-esteemが高くなるという結果が出ているとし，注意深く検討された縦断的研究においては信頼できる結果を出し得ることを指摘している。また，Rosenberg（1986）は，McCarthy & Hogeの考えを支持しながら，青年期におけるself-esteemは，11歳頃より傾き始め12，13歳頃に最も低くなり，その後は14歳頃までに徐々に改善され加齢とともに高くなっていくという仮説を立てている。そして，self-esteemの低下は年齢の効果ではなく，部分的には学校状況の変化に依存していると指摘している。

自己安定性次元も同様に，self-esteemが発達的に変化していくものか，それとも安定しているものかという研究の枠組み中で扱われてきており（Engel, 1959；Carlson, 1965；O'Malley & Bachman, 1983；Savin-Williams & Demo, 1983），研究間での一致した見解は得られず，上述の論議の中にあるのが現状である。Mortimer, Finch, & Kumka（1982）は，安定性に関する統一された定義がないことを第一の問題とし，安定性を4つのタイプ（Structural Invariance, Normative Stability, Level Stability, Ipsative Stability）にまとめている。また，Rosenberg（1986）は，自己意識の比較的変化しやすい面と，変化しにくい面と

を区別し，前者を barometric self-concept，後者を baseline self-concept と呼び，安定性を研究する際には，どちらが問題にされているかを考慮しなければならないとした。

Rosenberg は barometric self-concept を，自分自身に対する考えが変化する程度を尋ねることによって測定している。その結果，安定性は，self-esteem と同様に12，13歳で不安定さが増大し，14歳以降には徐々に改善されていくと述べている。そして，自己安定性の規定要因としては，他者の態度の曖昧さ，複数の他者の異なった見方，青年期における reflected appraisals への関心の高まり，アメリカ社会における青年の地位の曖昧さ，認知的発達に伴う自己意識の抽象化，自己知識の位置（locus of self knowledge）の変化などを挙げている。

結論として，Rosenberg は，自己意識の変化の時期として，12, 13歳をその転換点であると推論している。これは，児童期後期から青年期前期へ移行する時期である。

しかしながら，他方で，Harter（1990）は，青年期の自己意識が分化し統合していく過程として，3つの段階を挙げ各々の段階について，①11～13歳：対立する自己の属性が最も少なく，かつ葛藤もない，②14～16歳：対立する自己の属性が増え，それによりかなり強い内的な葛藤と苦痛を引き起こす，③17～18歳：対立する自己はあってもそれにより混乱することが少なくなってくる，と記述している。これによると青年期における自己の転換点は，青年期前期ではなく青年期中期であると考えることができる。Harter は，このような自己意識の発達の基底に認知能力とりわけ抽象化能力の問題を挙げている。

以上に述べてきたように，青年期における自己意識の形成に関しては，変化の生じる時期が複数指摘されている。また，それを規定する要因としては，第二次性徴による身体的発達，社会－認知過程（重要な他者に反映された評価，社会的比較，他者視点取得と自己覚知の増大，社会的役割期待の変化などを含む）や認知能力の発達など複数の様々な要因が推論されているが，実証的研究による特定化は未だ十分になされておらず，結論が出ていない状況にある。とりわけ，Cooley（1902）の「鏡映自己」や，Mead（1934）の「一般化された他者」などに関する理論以来，古くより強調されてきた「重要な他者」との関係に関しては，一方では，両親よりも友人や仲間集団が重要になってくるという見解があるが，他方では，青年－両親関係には一貫して親密で重要な関係が存在するという研究結果が多く見られるようになってきている（久世・平石，1992）。

そこで，本研究では，中学3年生から大学1，2年生までの青年を対象として，青年期前期の終りから青年期後期の始まりまでの時期の自己意識の発達過程を調査することにした。また，自己発達の規定因としては，社会的要因に関する議論の中心である「重要な他者」からの評価を取り上げることにした。本研究の目的は，以下に示すとおりである。

①自己肯定性および自己安定性における発達的変化の時期を同定する。

②自己発達に及ぼす「重要な他者」の影響について，年齢，性の要因を含め検討する。

③「重要な他者」からの評価の構造について，探索的分析を行う。

II．方　法

1．尺度構成

(1) 自己肯定性

自己肯定性次元を測定する尺度としては，平石（1987, 1988, 1990a）において使用されている尺度を短縮化し用いることにした。尺度作成の手続きについては平石（1990b）を参照されたい。[1)]

各下位尺度の内容は以下のとおりである。項目内容については付表1を参照。

対自己領域：
- 自己受容・自己信頼感（評価意識的側面）
- 自己実現的態度（動機的側面）
- 充実感（感情的側面）

対他者領域：
- 自己閉鎖性・人間不信（感情的側面）
- 自己表明・対人的積極性（対人行動的側面）
- 被評価意識・対人緊張（評価意識的側面）

回答形式は，“あてはまる”，“どちらかといえばあてはまる”，“どちらともいえない”，“どちらかといえばあてはまらない”，“あてはまらない” の5段階評定尺度であり，それぞれ順に5点，4点，3点，2点，1点の配点とした。（但し，逆転項目は，反対に1点から5点までの配点。）

1）平石（1990b）では，本研究における調査結果の一部として，自己意識尺度の主成分構造の分析および項目レベルでの得点の分析結果を報告している。自己肯定意識尺度および自己安定性尺度は，その主成分構造の結果を基にして構成された。

質問に際しての教示は，「現在の自分自身にとってあてはまると思われる項目」を選択するように指示した。

(2) 自己安定性

自己安定性次元を測定する尺度としては，Rosenberg (1979) の Stability of Self Scale (New York State) を参考にし，5項目から構成されている日本語版自己安定性尺度を作成した。(主成分構造を検討した結果，本研究においては4項目を使用した。)

回答形式は，“ある”，“ときどきある”，“あまりない”，“ない”の四肢選択，“よく変わる”，“ときどき変わる”，“あまり変わらない”，“変わらない”の四肢選択，“そう思う”，“ややそう思う”，“あまりそう思わない”，“そう思わない”の四肢選択で行なった。それぞれ，順に4点，3点，2点，1点の配点とした。質問に際しての教示は自己肯定意識尺度と同様である。

この尺度によって測定される安定性は，自己意識の比較的変化しやすい側面，すなわち，Rosenberg (1986) の言う，barometric self-concept を測定するものである。また，尺度得点は，自己に対する見方や考えが変化する程度，自己不安定さを表している。

(3) 重要な他者からの評価

Rosenberg (1979) の，perceived self-concept を測定するための項目を参考にし，文章完成法形式の質問項目を作成した。質問項目は12項目であり，そのうち重要な他者からの評価に関する項目は7項目である。(残りの5項目はダミー項目。)

本研究においては，7項目のうち，①友だち，②私のまわりの人たち，③父，④母，の四者に関する項目の分析を行うことにする。

文章完成法は，①中学生から大学生にかけて共通に使用することが可能，②投影法の一種であり刺激に対して，自己にとって関連性の高い反応が自由に引き出せる点，③青年の他者からの評価に対する認知の内容と構造を探索的に検討できる点，などを考慮し，本研究の目的に対して有効であると判断し採用した。

2．調査対象および調査実施方法

(1) 調査対象および調査実施期間

調査対象については表1を参照されたい。表1に示される対象数は，本論文における分析の対象となった人数である。意図的に回答を歪めて作成したと判断された調査回答や，拒否的で空欄の多い調査回答は分析から除外することにした。調査実施期間は，1990年6月中旬から7月中旬である。

(2) 調査実施方法

調査は集団で実施した。大学生においては，筆者が授業中に行い，中学生，高校生においては，調査実施方法を記したマニュアルを添え学校側に実施を依頼した。調査に要した時間は，おおよそ25分から40分までであり，中学生，高校生，大学生間で大きな差は認められなかった。

Ⅲ．結　果

1．自己意識の発達－学年と性の要因について－

(1) 自己意識尺度得点の平均，標準偏差および分散分析の結果

まず始めに，自己意識の発達について学年と性の要因を考慮して，各群別に尺度得点の平均値と標準偏差を算出した。

次に各尺度得点の平均値の差の分析（学年と性の2要因分散分析）を試みた。結果は，表2に示されるとおりである。

①自己肯定意識尺度

自己肯定意識尺度得点の平均値を見ると，高校生女子で「自己実現的態度」，「充実感」，「被評価意識・対人緊張」の3尺度について，大学生男子で「被評価意識・対人緊張」の1尺度でニュートラルな点数よりも否定的な得点を示していた。しかし，それ以外についてはすべて肯定的な得点を示していた。

表1　分析対象者

学年＼性別	自己意識尺度得点の分析			文章完成法の分析			自己意識尺度得点と文章完成法の分析		
	男子	女子	合計	男子	女子	合計	男子	女子	合計
中学3年生	115	99	214	102	87	189	87	75	162
高校2年生	114	144	258	92	116	208	84	103	187
大学1，2年生	166	153	319	147	145	292	137	137	274
合計	395	396	791	341	348	689	308	315	623

表2　自己意識尺度得点の平均，標準偏差および分散分析の結果

尺度名＼学年，性別	中学生 男子 MEAN	中学生 男子 SD	中学生 女子 MEAN	中学生 女子 SD	中学生 全体 MEAN	中学生 全体 SD	高校生 男子 MEAN	高校生 男子 SD	高校生 女子 MEAN	高校生 女子 SD	高校生 全体 MEAN	高校生 全体 SD	大学生 男子 MEAN	大学生 男子 SD	大学生 女子 MEAN	大学生 女子 SD	大学生 全体 MEAN	大学生 全体 SD	主効果 学年差	主効果 性差	交互作用
自己肯定性次元																					
対自己領域 自己受容	16.51	2.86	15.23	3.24	15.92	3.10	16.02	3.05	15.69	2.78	15.83	2.91	16.07	2.98	16.44	2.48	16.25	2.75	n. s.	n. s.	** 大女>中女／中男>中女
対自己領域 自己実現的態度	25.12	6.13	22.60	6.10	23.95	6.23	22.62	6.40	20.80	5.93	21.60	6.20	21.76	6.40	23.34	5.64	22.52	6.09	*** 中>大・高	n. s.	*** 中男>高男・大男，大女>高女／中男>中女，高男>高女，大女>大男
対自己領域 充実感	27.89	7.28	25.73	7.74	26.89	7.56	25.51	7.04	23.56	6.54	24.42	6.82	23.98	7.14	26.90	6.11	25.38	6.82	*** 中>大・高	n. s.	*** 中男>高男・大男，大女・中女>高女／中男>中女，高男>高女，大女>大男
対他者領域 自己閉鎖性・人間不信	16.06	6.72	17.92	6.74	16.92	6.78	19.25	8.01	20.40	6.77	19.89	7.35	19.01	6.73	16.84	5.73	17.97	6.35	*** 高>大・中	n. s.	*** 高男・大男>中男，高女>中女・大女／中女>中男，大男>大女
対他者領域 自己表明・対人的積極性	23.78	5.98	23.19	5.43	23.51	5.73	22.73	5.70	22.47	5.29	22.58	5.46	22.32	5.55	24.25	5.28	23.25	5.50	n. s.	n. s.	* 大女>高女／大女>大男
対他者領域 被評価意識・対人緊張	19.53	6.58	20.36	6.72	19.92	6.64	20.89	6.33	21.95	6.35	21.48	6.35	21.75	5.92	19.34	6.25	20.60	6.19	* 高>中	n. s.	** 大男>中男，高女>大女／大男>大女
自己安定性次元																					
自己不安定性	10.02	3.03	10.34	2.27	10.17	2.70	10.42	2.77	11.02	2.54	10.76	2.66	11.40	2.36	11.07	2.15	11.24	2.26	*** 大>高・中	n. s.	n. s.

注）＊は $p<.05$，＊＊は $p<.01$，＊＊＊は $p<.001$ で有意。

分散分析の結果については，自己肯定意識尺度6尺度のうち，学年差が認められたのは，「自己実現的態度」，「充実感」，「自己閉鎖性・人間不信」，そして「被評価意識・対人緊張」の4尺度である。Tukey 法による多重比較を行った結果，いずれの尺度においても中学生の得点が最も肯定的な傾向を示していた。高校生と大学生の間の得点差に関しては，「自己閉鎖性・人間不信」尺度についてのみ有意差が認められたが，全ての尺度について高校生の得点が最も否定的な傾向を示していた。

性差に関してはいずれの尺度においても有意差は認められなかった。

交互作用に関しては，すべての尺度において有意差が認められた。そのため，学年と性に関する単純主効果の検定を行い，男女毎の学年間の比較に際しては，Tukey 法による多重比較を行った。その結果，男女別に学年間の差を比較してみると，男子では，中学生男子が高校生男子と大学生男子に比べて，肯定的な自己意識を有していることが見いだされた。高校生と大学生については，有意差は認められないが，6尺度中4尺度では，高校生の方が肯定的な傾向を示していた。

他方，女子に関しては，高校生の女子が最も否定的な自己意識を有しており，大学生の女子が最も肯定的であった。これらの結果から，中学生から大学生にかけての得点変化は，男子の場合，直線的に否定的傾向に向かうのに対し，女子の場合には，中学生から高校生にかけて否定的傾向に向かい，大学生で最も肯定的な傾向に回復するという曲線的関係が見いだされた。

また，各学年別に男女差を比較した結果，中学生では男子が女子に比べて肯定的（4尺度），高校生では男子が女子に比べ肯定的（2尺度），大学生では女子が男子に比べ肯定的（5尺度）であった。

②自己安定性尺度

自己安定性尺度得点の平均値を見ると，中学生でニュートラルな点数に近く，そこから高校生，大学生にかけて徐々に不安定な方向に向かっていた。

分散分析の結果については，学年の要因のみ有意であった。Tukey法による多重比較の結果，中学生と高校生に比べて，大学生が最も不安定な自己意識を有していることが示された。

(2)　自己意識尺度得点間の相関係数（ピアソン）

自己意識7尺度の得点間の相関係数（ピアソン）を全体，学年別，各学年男女別に算出した。結果は，表3－1，表3－2，表3－3に示されるとおりである。

表3－1の結果より，自己肯定性に関しては，下位尺度間の内部相関はいずれも高く，対自己領域と対他者領

表3－1　自己意識尺度得点間の相関係数（全体）

	尺度名	1	2	3	4	5	6
1	自己受容						
2	自己実現的態度	.45***					
3	充実感	.44***	.67***				
4	自己閉鎖性・人間不信	−.30***	−.40***	−.62***			
5	自己表明・対人的積極性	.52***	.48***	.52***	−.45***		
6	被評価意識・対人緊張	−.31***	−.22***	−.43***	.51***	−.35***	
7	自己不安定性	.03	−.03	−.17***	.20***	.02	.27***

注）＊は$p<.05$，＊＊は$p<.01$，＊＊＊は$p<.001$で有意。

表3－2　自己意識尺度得点間の相関係数（学年別）

		尺度名	1	2	3	4	5	6
中学	1	自己受容						
	2	自己実現的態度	.50***					
	3	充実感	.46***	.66***				
	4	自己閉鎖性・人間不信	−.36***	−.48***	−.64***			
	5	自己表明・対人的積極性	.57***	.48***	.56***	−.49***		
	6	被評価意識・対人緊張	−.31***	−.23***	−.46***	.58***	−.39***	
	7	自己不安定性	−.04	−.03	−.16*	.27***	−.02	.41**
高校	1	自己受容						
	2	自己実現的態度	.47***					
	3	充実感	.43***	.62***				
	4	自己閉鎖性・人間不信	−.24***	−.36***	−.63***			
	5	自己表明・対人的積極性	.50***	.47***	.54***	−.43***		
	6	被評価意識・対人緊張	−.27***	−.13*	−.39***	.43***	−.33***	
	7	自己不安定性	.07	.02	−.16**	.20**	−.06	.21***
大学	1	自己受容						
	2	自己実現的態度	.41***					
	3	充実感	.43***	.69***				
	4	自己閉鎖性・人間不信	−.31***	−.34***	−.58***			
	5	自己表明・対人的積極性	.49***	.47***	.46***	−.42***		
	6	被評価意識・対人緊張	−.33***	−.26***	−.41***	.52***	−.33***	
	7	自己不安定性	.04	−.04	−.16**	.13*	.13*	.20***

注）＊は$p<.05$，＊＊は$p<.01$，＊＊＊は$p<.001$で有意。

域との間の相関関係も高いことが示された。他方，自己安定性次元と自己肯定性次元との相関については，「充実感」，「自己閉鎖性・人間不信」，そして「被評価意識・対人緊張」と自己不安定性との間に有意な相関が見いだされたが，残る3尺度とは無相関であった。

表3－2の結果によって学年差を検討してみると，表3－1とほぼ同様の傾向が示唆されている。しかしながら，学年差としては，「自己実現的態度」と「被評価意識・対人緊張」との相関が高校生において若干低下している点が見いだされる。また，自己安定性次元と自己肯定性次元との相関については，「自己不安定性」と「自己表明・対人的積極性」との間に大学生のみ有意な相関

表３－３　自己意識尺度得点間の相関係数（学年・性別）

	尺度名	1	2	3	4	5	6	7
中学	1 自己受容		.47***	.50***	−.33***	.48***	−.29**	−.12
	2 自己実現的態度	.50***		.66***	−.46***	.47***	−.10	−.02
	3 充実感	.39***	.64***		−.61***	.63***	−.38***	−.18
	4 自己閉鎖性・人間不信	−.36***	−.47***	−.66***		−.41***	.52***	.40***
	5 自己表明・対人的積極性	.68***	.50***	.49***	−.60***		−.28**	−.07
	6 被評価意識・対人緊張	−.33***	−.37***	−.54***	.64***	−.53***		.50***
	7 自己不安定性	.09	−.01	−.13	.07	.06	.29**	
高校	1 自己受容		.56***	.46***	−.23*	.61***	−.18	.28**
	2 自己実現的態度	.37***		.68***	−.40***	.50***	−.14	.18
	3 充実感	.39***	.56***		−.61***	.61***	−.40***	−.06
	4 自己閉鎖性・人間不信	−.25**	−.30***	−.64***		−.38***	.41***	.18*
	5 自己表明・対人的積極性	.40***	.45***	.48***	−.49***		−.38***	.05
	6 被評価意識・対人緊張	−.34***	−.11	−.37***	.45***	−.29***		.16
	7 自己不安定性	−.12	−.10	−.23**	.19*	−.15	.23**	
大学	1 自己受容		.44***	.44***	−.29***	.52***	−.33***	.04
	2 自己実現的態度	.36***		.73***	−.40***	.48***	−.32***	−.06
	3 充実感	.41***	.62***		−.57***	.42***	−.40***	−.25**
	4 自己閉鎖性・人間不信	−.32***	−.23**	−.55***		−.41***	.49***	.19*
	5 自己表明・対人的積極性	.45***	.42***	.45***	−.39***		−.28***	.10
	6 被評価意識・対人緊張	−.33***	−.16*	−.38***	.53***	−.34***		.21**
	7 自己不安定性	.06	−.01	−.02	.03	.20*	.16	

注１）右上：男子　左下：女子
注２）＊は$p<.05$，＊＊は$p<.01$，＊＊＊は$p<.001$で有意。

が見いだされた点，「自己不安定性」と「被評価意識・対人緊張」との間の相関は，中学生において他より高い傾向がある点が見いだされた。

さらに表３－３により，各学年とも男女別に相関関係の相違を検討することにする。まず第一に，自己肯定性次元内の相関関係の相違を見ると，「被評価意識・対人緊張」との相関関係においてのみ学年差が認められる。男子の学年間の比較をしてみると，大学生では，「被評価意識・対人緊張」と「自己受容」，「自己実現的態度」との間に有意な負の相関が認められるが，中学生では「自己実現的態度」，高校生では「自己受容」，「自己実現的態度」との間の有意な相関は見いだされていない。また，女子の場合には「被評価意識・対人緊張」と「自己実現的態度」との間の相関が高校生において有意ではなくなっているのが分かる。

自己安定性次元に関しては特に学年間，男女間共に顕著な異なった相関パターンが見いだされている。男子では，中学生では「自己閉鎖性・人間不信」，「被評価意識・対人緊張」との間に正の高い相関が見いだされているが，高校生と大学生ではその相関は低くなっている。しかし，高校生では，「自己受容」との間に正の有意な相関が見いだされ，自己の不安定さに肯定的な意味あいが示唆されている。また，大学生では，「充実感」との間に負の相関が認められている。

女子の場合，中学生では，「自己不安定性」が「被評価意識・対人緊張」とのみ正の相関を示しているのに対して，高校生では，「充実感」と負の相関，「自己閉鎖性・人間不信」と正の相関が有意な相関として加わっている。この高校生女子の相関パターンは大学生男子のそれと類似している。そして，大学生女子においては，「自己不安定性」は，「自己表明・対人的積極性」とのみ正の相関を示している。ここでの自己の不安定さは肯定的な意味あいを含んでいる。

(3) 自己意識尺度得点の信頼性（α係数）

各尺度の信頼性係数（内的整合性）をα係数によって

表4　自己意識尺度得点の信頼性（α係数）

尺度名＼学年，性別		中学生			高校生			大学生			全体
		男子	女子	全体	男子	女子	全体	男子	女子	全体	
自己肯定性次元											
対自己領域	自己受容	.61	.74	.69	.69	.67	.68	.72	.66	.70	.69
	自己実現的態度	.83	.83	.84	.86	.85	.86	.86	.83	.85	.85
	充実感	.85	.91	.88	.87	.85	.86	.88	.84	.87	.87
対他者領域	自己閉鎖性・人間不信	.86	.85	.86	.90	.85	.88	.85	.82	.84	.86
	自己表明・対人的積極性	.81	.79	.79	.82	.80	.80	.82	.80	.82	.80
	被評価意識・対人緊張	.81	.86	.83	.83	.89	.86	.82	.86	.84	.85
自己安定性次元											
	自己不安定性	.78	.62	.73	.74	.72	.73	.69	.60	.65	.71

算出した。自己受容尺度と自己安定性尺度においては，.60台の数値が認められるが，全体として高い信頼性係数が認められた。これによって，各尺度を中学生から大学生までにわたって共通に適用することが可能になると考えられる。

2．重要な他者からの評価の認知―評価次元と明瞭性次元について―

(1) 重要な他者からの評価に関する内容分析―次元の抽出

文章完成法の各項目の内容をＫＪ法的な手法によって分類した結果，評価的な次元として，①肯定，②否定，③客観・中立，④両価性，の４つのいずれかに分類できた。しかし，すべての回答を４つに分類した場合，回答内容には，断定的で明瞭な表現のものもあれば，推測的で曖昧なものまで確信の程度に幅があることが見いだされた。そこで新たにこれを「明瞭性」の次元と命名し，①明瞭，②不明瞭の２つの基準を設定した。

この２つの次元による分類基準とそれに含まれる内容は，表５－１と表５－２に示されるとおりである。そして，これらの分類基準に沿って評定マニュアルを作成し，４項目のそれぞれの回答結果に対して評定を行った。評定マニュアルは，今回の調査結果のほぼすべての種類の反応が具体例として記されているものである。ここでは紙数の都合上，割愛した。

また，臨床心理学系の大学院生２名を加え３名によってランダムに抽出された100名分の回答について評定を行い，評定の一致率によって信頼性の検討を行った。結果は表６に示されるとおりである。各次元について独立に評定を行った結果，いずれも十分な値を得ることができた。

表５－１　文章完成法の結果の分類基準
―評価次元と明瞭性次元

評価次元	明瞭性次元	
	明瞭（断定的）	不明瞭（推測的）
肯定	肯定的	肯定的推測
否定	否定的	否定的推測
客観・中立	客観・中立的	客観・中立的推測，不明
両価性	両価的	両価的推測

注１）評価次元に関する評定は，次の２点を吟味する。
①他者からの評価に対してどのような認識，推測をしているか（内容面）。
②そして、それに対してどのような評価をし、どのような感情が喚起されていると考えられるか（評価面）。

注２）明瞭性次元に関する評定は、次の２点を判断基準とする。
①明瞭：主として断定的で明確な形で意識され記述されているもの。
例）～だ！、～と思う、～にちがいない、～だと信じます
②不明瞭：主として推測的で、疑問形によって記述されているもの。
例）～だろう、～かもしれない、～だろうか？、多分～、～という気がする、～という感じがする、～でしょう

(2) 評価次元に関する評定結果

各項目について全体と男女別に，学年×評価次元（３×４）のクロス集計を行った結果が，表７－１と図１－１，図１－２，そして図１－３に示されるものである。χ^2値は，全体では４項目すべてにおいて１％水準以上で有意であった。また，男子では４項目すべてにおいて，５％以上で有意であった。（但し，「私のまわりの人たち」に関しては，25％のセルで５より小さい期待値を持っていたためχ^2分析は有効ではなかった。）

表５－２　文書完成法の結果の分類基準と具体的内容

	明　　瞭	不　明　瞭
肯定	肯　定 ①人格特徴に対する肯定的評価（主として形容詞によるもの）。 ②知的能力に対する肯定的評価（主として形容詞によるもの）。 ③友人・周囲の人々・母親・父親の被検者に対する肯定的な態度，感情	肯定的推測 ①友人・周囲の人々・母親・父親の被検者に対する人格特徴，知的能力に対する評価および態度，感情への肯定的な推測。 ②友人・周囲の人々・母親・父親の評価の不明瞭さにかかわらず，被検者の態度が肯定的である場合。
否定	否　定 ①人格特徴に対する否定的評価（主として形容詞によるもの）。 ②知的能力に対する否定的評価（主として形容詞によるもの）。 ③友人・周囲の人々・母親・父親の被検者に対す否定的な態度，感情。	否定的推測 ①友人・周囲の人々・母親・父親の被検者に対する否定的な評価についての推測。 ②友人・周囲の人々・母親・父親の評価への不安，心配，恐れなど。 ③友人・周囲の人々・母親・父親の評価の不明瞭さにかかわらず，被検者の態度が否定的である場合。
客観・中立	客観・中立 ①人格特徴に対する客観的，中立的評価（主として形容詞によるもの）。 ②友人・周囲の人々・母親・父親の被検者に対する客観的，中立的態度，感情。 ③その他 肯定的とも否定的とも解釈できないもの，客観的な特徴が冷静に記述されていると思われるもの。	客観・中立的推測および不明 ①友人・周囲の人々・母親・父親の評価が不明な場合。 ②友人・周囲の人々・母親・父親の評価に対する願望。 ③友人・周囲の人々・母親・父親の評価に対する客観的，中立的な推測など。
両価性	両価性 ①被検者の一面的，多面的な特徴に対する両価的な評価。 ②複数の友人・周囲の人々・母親・父親による両価的な評価。 ③友人・周囲の人々・母親・父親の評価に対する被検者の両価的な感情 ④友人・周囲の人々・母親・父親の評価と被検者のそれに対する感情が相容れない場合。	両価的推測 ①明瞭な評価意識と同様の内容について疑問形，推測の形で表現されているもの。

注）表中の「周囲の人々」は，「私のまわりの人たちは」の項目を指している。

表６　文章完成法の評定の一致率（平均値）

項目／次元	三人中三人の一致率				三人の一致率			
	友達	人々	母親	父親	友達	人々	母親	父親
評価	.85	.83	.86	.86	.78	.76	.80	.80
明瞭	.91	.92	.93	.91	.87	.88	.89	.86

他方，女子においては，「母親」についてのみ１％水準で有意であった。

結果についての全体的な傾向を記述すると次のとおりである。①「友だち」や「私のまわりの人たち」に比べて，「母・父」からの評価はより肯定的と認知されている。②また，「母・父」からの評価では他に比べて，肯定と否定の占める割合が高い。③「私のまわりの人たち」からの評価に対しては，客観・中立的な認知が多い。④学年差を見ると，高校生が他に比べて肯定的な反応が低下している。また，友人を除けば，否定的な反応は高校生で最も高い。この傾向は，男女共に認められるが，男子においてより顕著である。

さらに，４項目間の評定結果の関連について連関係数（クラメールのＶ）を算出したところ，表８－１－１，表８－１－２，そして表８－１－３に示される結果が得られた。全体としては，４項目間の相互連関のすべてが有意であった。しかし，連関係数の高さから「友だち」と「私のまわりの人たち」，「父」と「母」がそれぞれ高い数値を示していた。この傾向について学年別に見てみると，高校生においては４項目間の相互連関がすべて有意であるが，中学生と大学生では半分が有意ではなかった。男女別でもこのような学年差が認められるが，中学生男子と中学生女子，そして大学生女子においては，

表7－1　文章完成法評定結果―評価次元（%）

		全体				男子				女子			
		肯定	否定	客・中	両価	肯定	否定	客・中	両価	肯定	否定	客・中	両価
友人	中学	33.86	21.69	37.04	7.41	36.27	15.69	41.18	6.86	31.03	28.74	32.18	8.05
	高校	24.04	30.77	40.38	4.81	23.91	28.26	44.57	3.26	24.14	32.76	37.07	6.03
	大学	31.85	33.22	26.71	8.22	30.61	35.37	29.93	4.08	33.10	31.03	23.45	12.41
人々	中学	22.75	22.22	50.26	4.76	26.47	15.69	57.84	0.00	18.39	29.89	41.38	10.34
	高校	15.38	31.73	47.12	5.77	14.13	31.52	51.09	3.26	16.38	31.90	43.97	7.76
	大学	29.45	28.08	33.90	8.56	30.61	27.21	36.73	5.44	28.28	28.97	31.03	11.72
母親	中学	47.09	26.98	22.75	3.17	48.04	23.53	24.51	3.92	45.98	31.03	20.69	2.30
	高校	37.02	33.65	23.08	6.25	30.43	32.61	33.70	3.26	42.24	34.48	14.66	8.62
	大学	47.60	31.16	11.64	9.59	46.26	37.41	12.93	3.40	48.97	24.83	10.34	15.86
父親	中学	43.92	28.04	22.22	5.82	46.08	21.57	26.47	5.88	41.38	35.63	17.24	5.75
	高校	30.29	37.50	27.40	4.81	29.35	31.52	38.04	1.09	31.03	42.24	18.97	7.76
	大学	43.84	29.11	18.15	8.90	42.18	30.61	21.77	5.44	45.52	27.59	14.48	12.41

注）表中の「人々」は「私のまわりの人たちは」の項目を指している。以下，すべての表における「人々」の記述についても同様である。

表7－2　文章完成法評定結果―明瞭性次元（%）

		全体		男子		女子	
		明瞭	不明瞭	明瞭	不明瞭	明瞭	不明瞭
友人	中学	69.31	30.69	78.43	21.57	58.62	41.38
	高校	66.83	33.17	69.57	30.43	64.66	35.34
	大学	76.71	23.29	75.51	24.49	77.93	22.07
人々	中学	63.49	36.51	69.61	30.39	56.32	43.68
	高校	62.50	37.50	65.22	34.78	60.34	39.66
	大学	69.52	30.48	70.75	29.25	68.28	31.72
母親	中学	91.01	8.99	92.16	7.84	89.66	10.34
	高校	86.06	13.94	86.96	13.04	85.34	14.66
	大学	92.47	7.53	89.12	10.88	95.86	4.14
父親	中学	88.89	11.11	89.22	10.78	88.51	11.49
	高校	84.62	15.38	83.70	16.30	85.34	14.66
	大学	89.04	10.96	85.03	14.97	93.10	6.90

「友だち・私のまわりの人たち」と「母・父」は比較的独立した他者として認知されていることが示された。

また，男子は女子に比べて，各学年とも「母」と「父」の評価次元での連関が高かった。

(3) 明瞭性次元に関する評定結果

明瞭性次元についても同様に，各項目について全体と男女別に，学年×明瞭性次元（3×2）のクロス集計を行った。結果は，表7－2と図2－1，図2－2そして図2－3に示されるとおりである。

χ^2 値が有意であったのは，「友だち」の項目で全体と女子の場合，「母」の項目で女子の場合の3つのみであった。

これらの結果から傾向として認められるのは以下のとおりである。①「友だち・私のまわりの人たち」に比べ，「母・父」で「明瞭」の占める割合が高い。②女子の場合，「友だち・私のまわりの人たち」の明瞭性が学年と共に上昇している。男子にはこの傾向は認められない。

さらに，4項目間の評定結果の関連について連関係数（ϕ係数）を算出したところ，表8－2－1，表8－2－2，そして表8－2－3に示される結果が得られた。全体としては，4項目間の相互連関のすべてが有意であった。しかし，連関係数の高さから検討すると評価次元と同様に「友だち」と「私のまわりの人たち」，「母」と「父」がそれぞれ高い数値を示していた。

学年別に見ると，高校生では「友だち」と「母・父」の連関が有意ではなくなっている。各学年について男女別に分析した結果，性差が認められた。男子では中学，

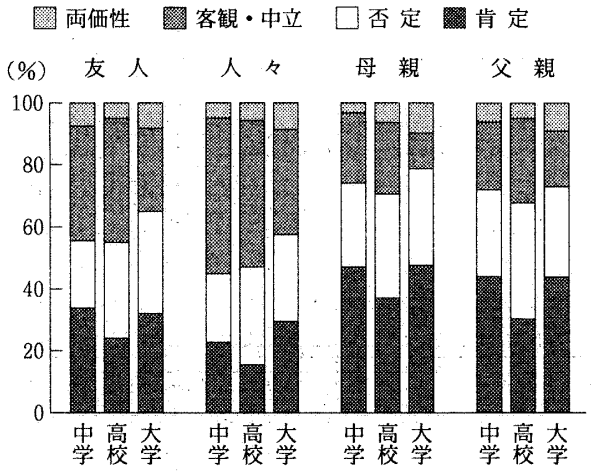

図１－１　文章完成法評定結果－評定次元(男女)

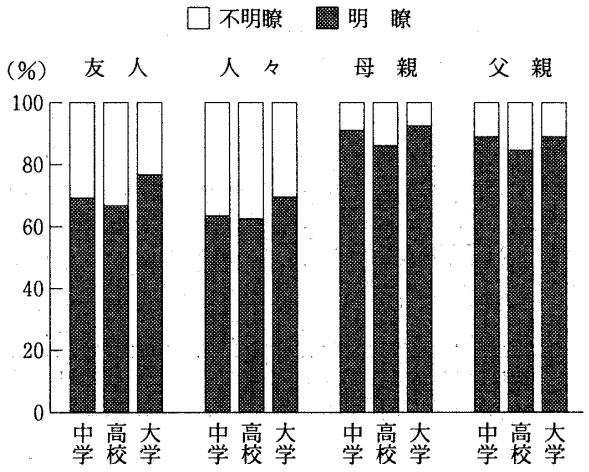

図２－１　文章完成法評定結果－明瞭性次元(男女)

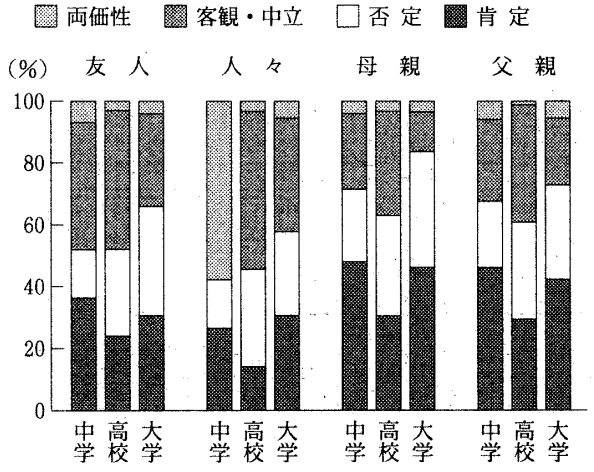

図１－２　文章完成法評定結果－評定次元(男子)

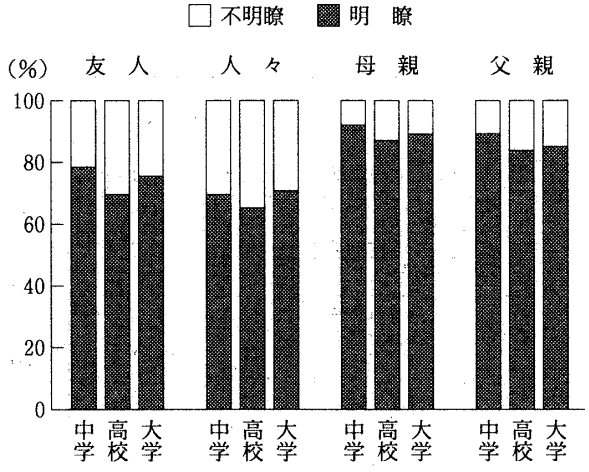

図２－２　文章完成法評定結果－明瞭性次元(男子)

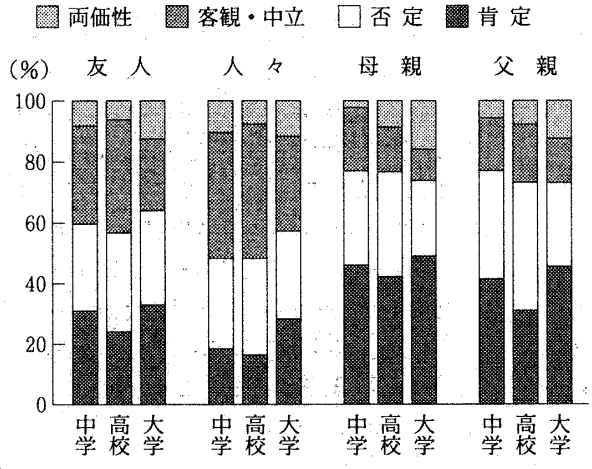

図１－３　文章完成法評定結果－評定次元(女子)

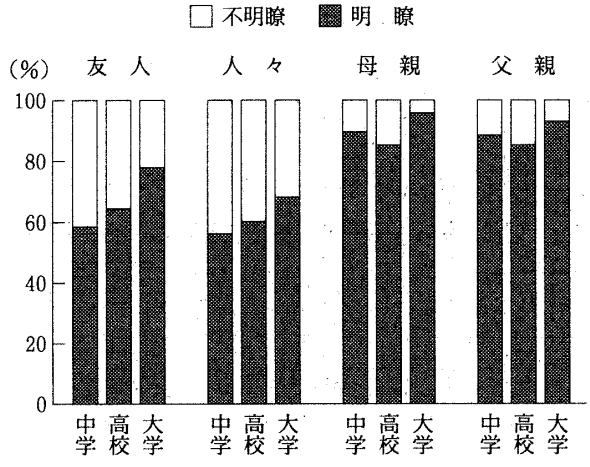

図２－３　文章完成法評定結果－明瞭性次元(女子)

表8－1－1　文章完成法各項目間の連関係数（クラメール）―評価次元（全体）

		1	2	3
1	友人			
2	人々	.33***		
3	母親	.17***	.14***	
4	父親	.14***	.16***	.45***

注）＊はp＜.05，＊＊はp＜.01，
＊＊＊はp＜.001で有意。

表8－1－2　文章完成法各項目間の連関係数（クラメール）―評価次元（学年別）

			1	2	3
中学	1	友人			
	2	人々	.36***		
	3	母親	.14	.19*	
	4	父親	.13	.16	.50***
高校	1	友人			
	2	人々	.36***		
	3	母親	.20**	.23***	
	4	父親	.23***	.25***	.55***
大学	1	友人			
	2	人々	.30***		
	3	母親	.19***	.08	
	4	父親	.12	.13	.36***

注）＊はp＜.05，＊＊はp＜.01，
＊＊＊はp＜.001で有意。

表8－1－3　文章完成法各項目間の連関係数（クラメール）―評価次元（学年・性別）

			1	2	3	4
中学	1	友人		.38***	.15	.17
	2	人々	.39***		.23	.24
	3	母親	.19	.21		.65***
	4	父親	.13	.19	.33***	
高校	1	友人		.39***	.32***	.33***
	2	人々	.35***		.32***	.41***
	3	母親	.18	.29***		.70***
	4	父親	.19	.28**	.38***	
大学	1	友人		.34***	.25***	.20*
	2	人々	.28***		.14	.22*
	3	母親	.19	.11		.50***
	4	父親	.11	.11	.24**	

注1）右上：男子　左下：女子
注2）＊はp＜.05，＊＊はp＜.01，
＊＊＊はp＜.001で有意。

表8－2－1　文章完成法各項目間の連関係数（φ係数）―明瞭性次元（全体）

		1	2	3
1	友人			
2	人々	.42***		
3	母親	.19***	.21***	
4	父親	.14***	.17***	.63***

注）＊はp＜.05，＊＊はp＜.01，
＊＊＊はp＜.001で有意。

表8－2－2　文章完成法各項目間の連関係数（φ係数）―明瞭性次元（学年別）

			1	2	3
中学	1	友人			
	2	人々	.47***		
	3	母親	.23***	.22**	
	4	父親	.17*	.19**	.60***
高校	1	友人			
	2	人々	.40***		
	3	母親	.13	.23***	
	4	父親	.12	.17*	.71***
大学	1	友人			
	2	人々	.39***		
	3	母親	.21***	.18**	
	4	父親	.12*	.15*	.56***

注）＊はp＜.05，＊＊はp＜.01，
＊＊＊はp＜.001で有意。

表8－2－3　文章完成法各項目間の連関係数（φ係数）―明瞭性次元（学年・性別）

			1	2	3	4
中学	1	友人		.43***	.38***	.28**
	2	人々	.48***		.28**	.25*
	3	母親	.10	.16		.60***
	4	父親	.06	.12	.59***	
高校	1	友人		.51***	.38***	.35***
	2	人々	.32***		.26*	.30**
	3	母親	−.05	.21*		.79***
	4	父親	−.05	.06	.66***	
大学	1	友人		.50***	.21*	.12
	2	人々	.28***		.21*	.11
	3	母親	.22**	.16		.65***
	4	父親	.12	.22**	.35***	

注1）右上：男子　左下：女子
注2）＊はp＜.05，＊＊はp＜.01，
＊＊＊はp＜.001で有意。

高校と4項目間の相互連関がすべて有意であるのに対し，女子では有意ではない組み合わせが多くなっている。しかし，大学生では男女は類似した傾向を示している。但し，男子では，「私のまわりの人たち」は「母」と有意な連関を示し「父」とは有意ではないのに対して，女子では逆に「父」と有意であり，「母」とは有意ではない。

3．自己意識の発達と重要な他者からの評価との関連

自己意識の発達に関与する重要な他者からの評価の影響を検討するために自己意識尺度の得点を従属変数，重要な他者からの評価に関する項目の評価次元と明瞭性次元の評定値を独立変数とし2要因分散分析を行った。分散分析は，重要な他者からの評価の各項目毎に自己意識尺度7尺度に対して行われた。また，主効果が有意であった場合，Tukey法による多重比較を行った。さらに交互作用については，単純主効果の検討を行った後，Tukey法による多重比較を行った。[2)]

なお，分散分析は始めに全体，続いて学年別に行った。各学年の男女別については評価次元と明瞭性次元の交互作用の分析を行う際に分析対象数が少なくなるために主効果の結果についてのみ簡単に触れることにする。

(1) 自己肯定性と重要な他者からの評価

結果は表9－1に示されるとおりである。自己肯定性と評価次元との関連については，「友だち」と「私のまわりの人たち」では6尺度すべて，「母」では3尺度，「父」では4尺度で有意差が認められた。明瞭性次元では，多重比較の結果，「友だち」で1尺度，「母」で2尺度，「父」で3尺度において有意差が認められた。

以上の結果から自己肯定性と重要な他者からの評価との関連性が示唆された。特に，評価次元では「友だち」と「私のまわりの人たち」との関連が大きく，明瞭性では「母」と「父」との関連が大きい傾向が認められた。

学年別に分析した結果については，表9－2，表9－3，そして表9－4に示されるとおりである。中学生では自己肯定性と「友だち」，「私のまわりの人たち」との関連が顕著である。しかし，高校生ではややその傾向は減少している。そして，大学生においては自己肯定性と「私のまわりの人たち」との関連は少ないが，「友だち」との関連は中学生と同様に顕著である。但し，中学生では，自己肯定性のなかの「被評価意識・対人緊張」と「友だち」との関連が示されたが，大学生ではそれが消失し，「自己受容」に替わっている。「母」と「父」については中学生から大学生まで一貫して同程度の関連性を示すが，大学生では特に「父」において有意差が顕著になっている。

各学年の男女別に分析した結果，中学生男子では，「友だち」の評価次元で3尺度，「父」の評価次元で2尺度において有意差が認められた。高校生男子では，「友だち」の評価次元で2尺度，「私のまわりの人たち」の明瞭性次元で1尺度，「父」の評価次元で1尺度において有意差が認められた。そして，大学生男子では，「友だち」の評価次元で5尺度，「私のまわりの人たち」の評価次元で3尺度，明瞭性次元で1尺度において有意差が認められた。

他方，中学生女子では，「友だち」の評価次元で4尺度，「私のまわりの人たち」の評価次元で3尺度，明瞭性次元で1尺度について有意差が認められた。しかし，「母」と「父」では主効果に有意差は認められなかった。高校生女子では，「私のまわりの人たち」の評価次元で3尺度について有意差が認められたのみであった。そして，大学生女子では，「母」の評価次元で2尺度についてのみ有意差が認められた。

(2) 自己安定性と重要な他者からの評価

自己安定性と重要な他者からの評価との関連については，評価次元に関して有意差が多く見いだされている。しかし，「父」においては，交互作用のみ有意であった。学年別に検討した結果では，高校生では有意差は認められず，中学生では「私のまわりの人たち」，「母」，そして「父」の3項目において有意差が認められ，大学生では「友だち」の項目においてのみ有意差が認められている。

各学年の男女別に分析した結果，男子では中学生の「母」の評価次元，「父」の明瞭性次元においてのみ有意差が認められた。他方，女子では，中学生の「私のまわりの人たち」の評価次元，高校生の「母」の評価次元において有意差が認められた。

IV 考 察

1．青年期における自己意識の発達と性差

(1) 自己肯定性について

青年心理学においては，従来，青年期危機説と青年期平穏説の2つの立場から，青年が理解されてきた（久世・平石，1992；平石，1993）。

本研究における自己肯定意識尺度得点の結果に関する限り，青年期における自己に対する意識は，全体として

2）表9－1から表9－4までの2要因分散分析を行う際の平均値と標準偏差については，すべて付表2に記されるとおりである。

表9－1　重要な他者からの評価と自己意識との関連―分散分析の結果（全体）

自己意識 下位尺度名 ＼ 重要な他者 要因	友人 主効果 評価	友人 主効果 明瞭性	友人 交互作用	人々 主効果 評価	人々 主効果 明瞭性	人々 交互作用	母親 主効果 評価	母親 主効果 明瞭性	母親 交互作用	父親 交互 評価	父親 交互 明瞭性	父親 交互作用
自己肯定性次元												
対自己領域 自己受容	** 肯>客			*** 肯>否・客・両								
対自己領域 自己実現的態度	*** 肯>客・否，両>否			** 肯>客・否			*** 肯>否	* 明>不		*** 肯>否	** 明>不	
対自己領域 充実感	*** 肯>客・否，両>否			*** 肯>客・両・否			*** 肯>否	** 明>不		*** 肯・客>否	*** 明>不	
対他者領域 自己閉鎖性・人間不信	*** 否>客・両・肯，客>肯			*** 否>客・肯			** 否>肯			*** 否>客・肯	*	
対他者領域 自己表明・対人的積極	*** 肯>客・否，両>否			** 肯>否・客						* 肯>否	* 明>不	
対他者領域 被評価意識・対人緊張	*** 否・客>肯	** 不>明		*** 否>客・肯，両>肯				*			*	*
自己安定性次元												
自己不安定性	*** 否>客・肯			** 否>客・肯			*** 否>肯・客	*				* 肯明>肯不

注）表内の略記号は各々以下の内容を示している。①有意水準（* : p<.05, ** : p<.01, *** : p<.001），②主効果（肯：肯定，否：否定，客：客観中立，両：両価性，明：明瞭，不：不明瞭），③交互作用（肯明：肯定明瞭，肯不：肯定不明瞭）

表9－2　重要な他者からの評価と自己意識との関連―分散分析の結果（中学生）

自己意識 下位尺度名 ＼ 重要な他者 要因	友人 主効果 評価	友人 主効果 明瞭性	友人 交互作用	人々 主効果 評価	人々 主効果 明瞭性	人々 交互作用	母親 主効果 評	母親 主効果 明瞭性	母親 交互作用	父親 主効果 評価	父親 主効果 明瞭性	父親 交互作用
自己肯定性次元												
対自己領域 自己受容												
対自己領域 自己実現的態度	** 両・肯>否									** 肯>否	*	
対自己領域 充実感	*** 肯・両・客>否			*** 肯・客>否			* 肯>否		** 注3）	** 肯>否	* 明>不	
対他者領域 自己閉鎖性・人間不信	*** 否>客・両・否		* 注2）	** 否>客・肯								
対他者領域 自己表明・対人的積極	** 肯>否			* 肯>否								
対他者領域 被評価意識・対人緊張	*** 否>客・肯・両			** 否>客・肯								** 注5）
自己安定性次元												
自己不安定性				** 否>客・肯			* 否>客		** 注4）			** 注6）

注1）表内の略記号は各々以下の内容を示している。①有意水準（* : p<.05, ** : p<.01, *** : p<.001），②主効果（肯：肯定，否：否定，客：客観中立，両：両価性，明：明瞭，不：不明瞭）
2）否定明瞭>両価性明瞭・肯定明瞭・客観中立明瞭
3）肯定明瞭>否定明瞭
4）否定明瞭・肯定明瞭>客観中立明瞭，否定不明瞭>肯定不明瞭 ／ 肯定明瞭>肯定不明瞭，否定不明瞭>否定明瞭
5）客観中立不明瞭>肯定不明瞭 ／ 肯定明瞭>肯定不明瞭，客観中立不明瞭>客観中立明瞭
6）否定不明瞭>肯定不明瞭

表９－３　重要な他者からの評価と自己意識との関連―分散分析の結果（高校生）

自己意識 ＼ 重要な他者	友人			人々			母親			父親		
要因	主効果		交互作用	主効果		交互作用	主効果		交互作用	主効果		交互作用
下位尺度名	評価	明瞭性		評価	明瞭			明瞭性		評価	明瞭性	
自己肯定性次元												
対自己領域　自己受容												
対自己領域　自己実現的態度				*	*					** 肯>否・両		* 注５）
対自己領域　充実感	*** 肯>客・否		** 注２）	*** 肯>客・否・両		* 注３）		* 明>不	* 注４）	**		* 注６）
対他者領域　自己閉鎖性・人間不信	*** 否>客・肯						** 否>客・肯			** 否>肯・客		
対他者領域　自己表明・対人的積極												
対他者領域　被評価意識・対人緊張	*	* 明>不										
自己安定性次元												
自己不安定性												

注１）表内の略記号は各々以下の内容を示している。①有意水準（* : p<.05, ** : p<.01, *** : p<.001), ②主効果（肯：肯定, 否：否定, 客：客観中立, 両：両価性, 明：明瞭, 不：不明瞭）
２）肯定明瞭>否定明瞭・客観中立明瞭, 肯定不明瞭・客観中立不明瞭>否定不明瞭 ／ 否定明瞭>否定不明瞭
３）肯定明瞭>客観中立明瞭・両価性明瞭 ／ 客観中立不明瞭>客観中立明瞭
４）肯定明瞭>肯定不明瞭
５）肯定明瞭>否定明瞭・両価性明瞭 ／ 肯定明瞭>肯定不明瞭
６）客観中立不明瞭>肯定不明瞭 ／ 肯定明瞭>肯定不明瞭

表９－４　重要な他者からの評価と自己意識との関連―分散分析の結果（大学生）

自己意識 ＼ 重要な他者	友人			人々			母親			父親		
要因	主効果		交互作用	主効果		交互作用	主効果		交互作用	主効果		交互作用
下位尺度名	評価	明瞭性		評価	明瞭性		評価	明瞭性		評価	明瞭性	
自己肯定性次元												
対自己領域　自己受容	* 肯>客			* 肯>客						* 肯>否		
対自己領域　自己実現的態度	** 肯>客・否						* 肯>否	* 明>不			* 明>不	
対自己領域　充実感	*** 肯>否・客									* 両>否	* 明>不	
対他者領域　自己閉鎖性・人間不信	*** 否・客>肯									* 否>肯	* 不>明	
対他者領域　自己表明・対人的積極	** 肯>否・客											
対他者領域　被評価意識・対人緊張												
自己安定性次元												
自己不安定性	** 否>肯											

注１）表内の略記号は各々以下の内容を示している。①有意水準（* : p<.05, ** : p<.01, *** : p<.001）, ②主効果（肯：肯定, 否：否定, 客：客観中立, 両：両価性, 明：明瞭, 不：不明瞭）

肯定的な方向を示していることが見出されている。しかしながら，自己肯定性は安定したものではなく，年齢と共に変化し，また性差も顕著であることが示された。

既に述べたように，Rosenberg（1986）は，多くの研究を概観しながら，自己肯定性は，12，13歳頃に最も低下し，その後は加齢と共に徐々に改善されるという発達の筋道を描いている。しかしながら，本研究では，それとは異なった結果が示された。男子の場合，中学生が最も自己肯定的であるが高校生，大学生で直線的に否定的な方向に向かっている。また，女子の場合，中学生から高校生にかけて自己否定的な方向に向かうが，大学生では肯定的な方向へ改善されている。そして，学年毎に性差を検討すると，中学生から高校生までは男子の方が女子よりも肯定的であるが，大学生になると逆転し，女子の方が男子よりも肯定的になる傾向が示されていた。

わが国における自己意識の研究では，加藤（1962）が中学1年生から高校1年生にかけての自己受容性の減少と，高校2年生から大学2年生にかけての自己受容性の増大を報告している。また，伊藤（1991）は女子青年では自己受容性の年齢差が認められないが，男子青年では中学生から高校生にかけて自己受容性の低下が認められていると報告している。しかし，他方で伊藤（1992）は，「男子は中学から高校段階にかけては高受容を維持するが，大学で低下する。一方女子は，中学から高校では低受容を示すが大学で高まる。つまり，男女とも高校から大学への移行期に大きく変化し，男子は自己否定化，女子は受容化という逆傾向を示す」（Pp. 208.）と報告している。このように幾つかの調査結果は必ずしも一致した傾向を示してはいない。しかしながら，本研究における結果は，男子の中学生から高校生への変化を除けば，伊藤（1992）の結果と類似している。

ところで，Rosenberg（1986）とSimmons & Blyth（1987）によると，青年期前期においては，男子は女子よりも高いself-esteemを有しているとされ，本研究における結果と一致している。また，その理由の一つとしては，女子の自己の身体的魅力に対する不満足さを挙げている。本研究における中学生と高校生における性差も，この身体的自己の影響が背景にあると考えられる。しかしながら，男子が中学生から高校，大学にかけて自己肯定性を低下させている点と，女子が高校生から大学生にかけて自己肯定性を高めていく過程に関しては，別の要因によって説明される必要がある。

自己肯定性を規定する要因としては，大きく2つのものが考えられる。ひとつは，認知的発達の要因，2つめは，社会的文脈の要因である。Harter（1990）は，青年期前期から中期にかけて，抽象化能力が発達し，それに伴って認知されている自己は多元的に分化するが，対立する自己の属性のために葛藤を経験するとしている。また，青年期中期においては，理想と現実とのずれが最大化することも葛藤や混乱の原因とみなされている。

また，Rosenberg（1979,1986）は，青年期における認知された自己は，外面的なものから内面的なものへと移行することを指摘している。そして，Harter（1990）は，このような内省力の高まりは自意識を強め，同時に他者からのまなざしに対する感受性を高めることを指摘し，このことは，過去に培われた役割やスキルと当時の理想的な規範との結びつきに対する疑問を高めさせると述べている。本研究で使用された「被評価意識・対人緊張」尺度はこの他者からのまなざし意識の高まりを表す尺度であるが，この尺度得点の結果は，上記の理論的説明と一致した傾向を示していた。

このような認知的発達の観点から眺めると，女子の自己発達は男子に先行して，自己否定から自己肯定へと再構成されていく図式を描くことができる。それに対して，男子は中学生では児童期的な無邪気で肯定的な自己評価が保たれているが，高校生から自己否定期に入り大学生ではさらに深まっているように思われる。

しかしながら，上記の認知的能力の発達による説明は，第二の要因として挙げた社会的文脈の要因と独立させて論じることはできない。自己評価が対人的な社会的評価過程によって規定されることは疑う余地のないところであるが，その社会的評価は個人が置かれている環境のなかで理想とされている価値，個人が期待されている社会的役割と個人が選択しコミットしている価値，現実の自己認知などの相互作用による影響を受けている。今日のわが国における学校教育の状況のなかでは，中学生から高校生にかけて一貫して学歴偏重，成績重視の価値観が浸透している現状が認められる。しかし，他方で大学生においては，学業以外の生活が広がり，高校生までとは異なった環境に置かれることになる。大学生は一方では成人としての扱いを受け，アルバイトなどの職業的活動をとおして学校以外の社会的経験を蓄積していく。

このような社会的文脈のなかで期待される役割に対して，それにどう対処しているのか，といった個人の態度の問題が，その個人の自己肯定性，とりわけ「自己受容」，「自己実現的態度」，そして，「充実感」といった自己感覚に影響しているものと考えられる。この社会的役割期待に対する個人の態度は，すなわちErikson（1959）の言う特定の集団の理想と自己の同一性とを一致させようとする自我同一性統合の側面を意味している。

本研究において示された高校生から大学生にかけての自己肯定性の男女差は，このような観点から説明される

ものと考えられる。例えば，男子の場合，中学校から大学にかけて期待される役割は，大学卒業後の職業に直結するものであり，価値が画一的である傾向が認められる。他方で，女子の場合，高校生までは男子と同様の学校状況のなかで，学歴偏重や成績至上主義の価値観にさらされてきている。しかしながら，そのような男性原理的価値とは異なった伝統的な女性役割も同時に期待され，そのために役割葛藤が生じやすくなっている。そして，大学生になると，卒業後の進路は男子とは異なり，職業だけでなく結婚の課題も同時に意識されることになる。その意味で女子青年が期待される社会的役割と価値は男子以上に多元的である。

自己意識尺度得点によって示された女子青年の高校生から大学生にかけての自己否定から自己肯定への変化は，このような社会的役割期待の変化のなかで，自我同一性を探求していく過程として理解する必要があろう。

(2) 自己安定性について

自己安定性についても，自己肯定性と同様に12，13歳頃に最も不安定となり，その後徐々に改善されていくとされている（Rosenberg,1986）。しかしながら，本研究における結果では，男女共に加齢に伴い一貫して不安定な方向に向かうことが示された。

本研究において使用された尺度は，自己に対する見方の変化を扱っているが，既に考察してきたように青年期における認知的発達に伴う自己の分化を考慮すると，青年が年齢と共に自己に対する多面的な側面を発見していくことは容易に理解できる。また，家庭と学校，さらにそれ以外の社会と青年の生活空間は加齢に伴って拡大する。本研究において示された結果は，このような認知的発達と生活空間のひろがりのなかで生起する自己の多様化，複雑化の側面を表しているのではないかと推論される。

自己安定性と自己肯定性との相関関係を見ると，自己の不安定さは，「自己閉鎖性・人間不信」，「被評価意識・対人緊張」と正の相関を示し，「充実感」と負の相関を示している。このことは，認知されている自己の多様性や不安定さが，他者からのまなざしと関係していることを示している。また，不安定さの増大は，対人関係上の緊張や回避あるいは充実感の喪失につながっている。

しかし，年齢と性の要因を考慮すると自己安定性の意味は若干異なってくることがわかる。男子の場合，高校生では，自己の不安定さは自己受容と正の相関を示している。そして，女子の場合，高校生では中学生，大学生の男子と同じ傾向を示しているが，大学生ではそれと異なり「自己表明・対人的積極性」と正の相関を示していた。この性差の背景にある要因については明らかではないが，男女共に高校生が転機となる傾向が伺える。また，自己肯定性同様に高校生女子が大学生男子と同じ傾向を示すという発達的な女子の先行が伺われる。

2．青年期における重要な他者

(1) 重要な他者からの評価の構造

Rosenberg（1979）では，重要な他者に認知されている自己（perceived self）については，「好ましさ」の次元で検討している。また，「他者の重要さ」を決定する変数としては，信用度や信頼を追加していた。本研究では，他者の重要性の程度については特に考慮していない。しかしながら，文章完成法形式の質問項目を使用することにより，肯定－否定を表す評価次元と共に，新たに明瞭さや曖昧さの程度を表す明瞭性の次元を抽出することができた。

(2) 青年の認知している重要な他者からの評価

本研究においては，「友だち」，「私のまわりの人たち」，「母」，「父」の四者を青年にとっての重要な他者として恣意的に選んでいる。この四者との関係について青年はどのような認知をしているのであろうか。

評価次元においては，両親は他の二者に比べて肯定的な評価や感情，態度を持っていると認知されている。逆に友人と周囲の人々は，両親に比べて，客観・中立的な反応が多い。また，明瞭性に関しても，青年の両親は他の二者に比べて明瞭と評定された割合が高い。明瞭性は青年自身が認知している他者の自己に対する評価，感情，態度の確かさであり，生活を共にしてきた歴史の長さと，心理的近さの結果であると理解できる。そのため，青年の内面に抱かれている両親のイメージはかなり明瞭で安定したものであると考えられる。他方，友人や周囲の人々は，複数で特定されないため，必ずしも一貫し安定したものとはなりにくいと考えられる。

学年と性の要因について検討すると，四者いずれにおいても，高校生で肯定の占める割合が減少し，否定の占める割合が増大している傾向が認められる。このことは，自己意識の発達差の中学生から高校生までの変化とは一致しているが，高校生から大学生までの変化とは一致していない。また，性差についても自己意識では顕著な学年と性の交互作用が認められたが，ここでは大きな性差は認められなかった。但し，友人と周囲の人々に関する明瞭性は，女子の場合，加齢と共に徐々に明瞭になる傾向が認められ，対人認知の発達における性差として考えられる。

(3) 重要な他者の自己意識形成への影響

青年が認知している重要な他者からの評価，感情，態度は，青年の自己意識に対してどのような影響をもっているのだろうか。Rosenberg（1979,1986）やHarter（1990）は，Cooley や Mead らの理論を紹介しながら青年の自己意識を形成する重要な他者の反映された評価（reflected appraisals）の重要性を述べている。

本研究においてもこの理論をほぼ支持する結果が得られている。友人，周囲の人々，両親のいずれにおいても青年の自己肯定性と自己安定性と強く関連していた。特に友人と周囲の人々に関する項目の回答は，評価次元について自己意識の7尺度すべてと関連している。また両親については，評価次元に加えて明瞭性次元においても自己肯定性と自己安定性との関連が認められた。自己安定性は自己に対する認知の不安定さの指標であり，評価次元とは異なるが，他者からの評価が否定的である場合，それが自己を脅かすために自己像が定着せず，安定しないものと推論できる。

学年別に検討すると，高校生では友人からの影響力がやや低下しているように思われる。また，中学生では周囲の人々の影響が大きいが大学生ではかなり小さくなっている。周囲の人々に関するこのような変化は，青年が特定の重要な他者の影響は受けても，不特定の複数の他者からは距離がとれ，独立した個を確立しつつある結果を示唆しているものと推論できる。他方で，両親については，一貫して同程度の影響力を有しており，青年と両親との関係の安定性と持続性が伺える。

しかしながら，この学年差の傾向は，性差を考慮するとき若干異なった考察が必要となる。つまり，男子の場合，中学生と高校生では友人と父親からの評価の影響力が強いが，大学生では友人からの影響も最大になる点と，父親に替わって周囲の人々からの影響が強くなる点が特徴となる。他方で，女子の場合，中学生では友人や周囲の人々の影響を強く受けるが，高校生では周囲の人々だけとなり，大学生では友人や周囲の人々の影響がなくなり，替わって母親の評価の影響を受けるようになる。このような性差は，自己意識の発達における交互作用の特徴と類似している。男子は加齢と共に両親以外の他者からの評価を強く意識するのに対して，女子は，中学生，高校生までは両親以外の他者からの評価を強く意識するが，大学生になるとその影響を受けなくなっているように思われる。これは，女子青年が男子よりも早期に「他者のまなざし」にとらわれることなく，自立した自己を形成し始めている結果であると推論できる。

3．今後の課題

従来の自己発達の研究においては，横断的研究の結果の一貫性のなさが指摘され，縦断的研究の必要性が唱えられてきた。そのため，本研究における結果も縦断調査や追試を通して更に検討される必要がある。とりわけ，高校生のサンプルは，偏差値による輪切りというわが国における受験体制，教育状況の結果により同年齢の母集団を代表しているものかどうか検討する必要がある。また，大学生に関しては，高校生同様のバイアスを受けるだけでなく，彼らが母集団全体の4割程度の割合を占めている青年に限られており，決して代表的なサンプルではないという点も考慮されなければならない。とりわけ，本研究における結果を説明する原理として推論される社会的役割期待と青年の価値の選択，あるいは将来展望，アイデンティティ探求の問題は，大学生において初めて問題となるものではなく，むしろ大学生という社会的地位そのものがある意志決定の結果であるということも忘れてはならない。その意味で，中学生から大学生にかけての長期間にわたる縦断調査が求められる。

第二の課題は，重要な他者からの評価に関する測定方法である。本研究においては探索的な構造の分析のために文章完成法形式の項目を採用したが結果の数量化の点で問題が残されている。そのため，高度な統計的解析に耐えうる尺度化が求められる。

第三の課題としては，考察のなかで述べてきた自己意識の発達に関与している認知－社会的要因の分析をさらに重ねていくことである。そこでは例えば，抽象化能力，性役割観，個性化などの構成概念が問題となるだろう。

文　　献

Allport, G. W. 1943 The ego in contemporary psychology. *Psychological Review,* **50**, 451-478.

Carlson, R. 1965 Stability and change in the adolescent's self-image. *Child Development,* **36**, 659-666.

Cooley, C. H. 1902 *Human nature and the social order.* New York : Charles Scribner & Sons.

Engel, M. 1959 The stability of the self-concept in adolescence. *Journal of Abnormal and Social Psychology,* **58**, 211-215.

Erikson, E. H. 1959 *Identity and the life cycle, Psychological issues.* Monograph I. New York : International Universities Press.

Erikson, E. H. 1963 *Childhood and society.* 2nd ed. New York : W. W. Norton.

Harter, S. 1990 Process underlying adolescent self-concept formation. In Montemayor, R., Adams, G. R., & Gullotta, T. P. *From childhood to adolescence : A transitional period?* Newbury Park : SAGE.

平石賢二 1987 青年期における精神的健康に関する一研究—青年期版精神健康意識調査票作成の試み— 昭和61年度名古屋大学大学院教育学研究科修士論文（未公刊）

平石賢二 1988 青年期における健康な自己意識の発達差 日本教育心理学会第30回総会発表論文集, 502-503.

平石賢二 1990a 青年期における自己意識の構造—自己確立感と自己拡散感からみた心理学的健康— 教育心理学研究, 38, 320-329.

平石賢二 1990b 青年期における自己意識の発達に関する研究（I）—自己肯定性次元と自己安定性次元の検討— 名古屋大学教育学部紀要—教育心理学科—, 37, 217-234.

平石賢二 1993 思春期への移行に伴う諸問題—学校移行と対処行動について— 中等教育研究—名古屋大学教育学部, 4, 111-124.

伊藤美奈子 1991 自己受容尺度作成と青年期自己受容の発達的変化－2次元から見た自己受容発達プロセス－ 発達心理学研究, 2, 70-77.

伊藤美奈子 1992 自己受容と性格特性との関連についての一考察 心理学研究, 63, 205-208.

加藤隆勝 1962 青年期における自己受容と自己批判の年齢的変容について 岐阜大学学芸学部研究報告（人文科学）, 11, 83-89.

加藤隆勝 1978 自己意識の発達に関する研究の現状と課題 東京教育大学教育学部紀要（第1部）, 24, 117- 124.

北村晴朗 1977 新版 自我の心理 誠信書房

久世敏雄 平石賢二 1992 青年期の親子関係研究の展望 名古屋大学教育学部紀要－教育心理学科－, 39, 77-88.

久世敏雄 平石賢二 辻井正次 1990 青年心理学における現状と課題（I） 名古屋大学教育学部紀要－教育心理学科－, 37, 65-106.

Lecky, P. 1945 *Self-consistency : A theory of personality.* New York : Island Press.

McCarthy, J. D. & Hoge, D. R. 1982 Analysis of age effects in longitudinal studies of adolescent self-esteem. *Development Psychology,* 18, 3, 372-379.

Mead, G. H. 1934 *Mind, self, and society.* Chicago : University of Chicago Press.

宮沢秀次 1978 青年期における自己受容性の一研究 名古屋大学教育学部紀要－教育心理学科－, 25, 105-117.

Mortimer, J. T., Finch, M. D., & Kumka, D. 1982 Persistence and change in development : The Multidimensional self-concept. Baltes, P. B. & Brim, Jr., O. G. (Eds.) *Life-span development and behabior.* Vol. 4 New York : Academic Press.

長島貞夫 藤原喜悦 原野広太郎 斎藤耕二 堀洋道 1966 自我と適応の関係についての研究 (1) －Self-Differential 作製の試み－ 東京教育大学教育学部紀要, 12, 85-91.

長島貞夫 藤原喜悦 原野広太郎 斎藤耕二 堀洋道 1967 自我と適応の関係についての研究 (2) －Self-Differential 作製の試み－ 東京教育大学教育学部紀要, 13, 59-67.

O'Malley, P. M. & Bachman, J. G. 1983 Self-esteem : change and stability between ages 13 and 23. *Developmental Psychology,* 19, 257-268.

Rogers, C. R. 1951 *Client-centered therapy.* Boston : Houghton.

Rogers, C. R. & Dymond, R. F. (Eds.) 1954 *Psychotherapy and personality change.* Chicago : University of Chicago Press.

Rosenberg, M. 1979 *Conceiving the Self.* New York : Basic Books.

Rosenberg, M. 1986 Self-concept from middle childhood through adolescence. Suls, J. & Greenwald, A. G. (Eds.) *Psychological perspectives on the self.* Vol. 3 New Jersey : Lawrence Erlbaum Associates.

斎藤久美子 1959 自己意識の分析による人格適応性の一研究 心理学研究, 30, 277-285.

Savin-Williams, R. C. & Demo, D. H. 1983 Conceiving or misconceiving the self:Issues in adolescent self-esteem. *Journal of Early Adolescence,* 3, 121-140.

Shavelson, R. J., Hubner, J. J., & Stanton, G. C. 1976 Self-concept : Validation of construct interpretations. *Review of Educational Re-*

search, **46**, 407-441.

椎名信治　1966　適応の指標としての自己概念の研究　教育心理学研究, **14**, 165-172.

Simmons, R. G., & Blyth, D. A.　1987　*Moving into adolescnce : The impact of pubertal change and school context.* New York : Aldine.

Snygg, P. & Combs, A. W. 1949 *Individual behavior : An new frame of reference for psychology.* New York : Harper.

Spranger, E. 1963 *Psychologie des Jugenalters. 27 aufl.* Heidelberg : Quelle & Meyer.（原田茂訳 1973　青年の心理　協同出版）

Wylie, R. C.　1979　*The self-concept revised edition Vol. 2 Theory and research on selected topics.* Lincoln : University of Nebraska Press.

（1993年9月3日　受稿）

ABSTRACT

A Study on the Development of Self-Consciousness in Adolescence (II)
—The relation between self-consciousness and perceived self by significant others—

Kenji HIRAISHI

The purpose of the present study was to investigate the development of self-consciousness in adolescence. In this article, self-consciousness involves two dimensions, namely, self-esteem (positive-negative) and stability (stable-unstable). In addition to this, the relations between self-consciousness and perceived selves by significant others (friends, people around subjects , and parents) were examined.

The subjects were 247 junior high school students (135 males and 112 females), 292 high school students (126 males and 166 females), and 341 undergraduate students (179 males and 162 females). They were administered a questionnaire consisted of three scales (Sense of Self-Positiveness Scale, Self-Stability Scale, and Scale for Perceived Self by Significant Others).

Major findings were as follows :

1) For male, self-esteem declined with advancing age and reached its low point at undergraduate age. For females, on the other hand, self-esteem declined with advancing age and reached its low point at high school age. At undergraduate age, however, it was improved. In addition to this, gender difference was found. At junior high and high school age, males had more positive self-esteem than females did. At undergraduate age, conversely, females had more positive self-esteem.
2) Sense of self-stability linearly declined with advancing age. There was no gender difference.
3) On perceived self by significant others, two dimensions were found. One was a dimension of evaluation. Another was a dimension of certainty.
4) Perceived selves by parents were more positive and certain than perceived selves by friends and people around subjects.
5) As expected, all perceived selves by significant others were significantly related to self-consciousness in adolescence. However, some gender difference exists. Self-consciousness of females became more independent of perceived self by friends with advancing age, whereas self-consciousness of males was consistently related to them.

付表1　各尺度の調査項目

Ⅰ．自己肯定意識尺度　　※　＊印は反転項目

A　対自己領域

・自己受容　4項目

自分なりの個性を大切にしている。
私には私なりの人生があってもいいと思う。
自分の良いところも悪いところもありのままに認めることができる。
自分の個性を素直に受け入れている。

・自己実現的態度　7項目

自分の夢をかなえようと意欲に燃えている。
情熱をもって何かに取り組んでいる。
前向きの姿勢で物事に取り組んでいる。
自分の良い面を一生懸命伸ばそうとしている。
張り合いがあり、やる気が出ている。
本当に自分のやりたいことが何なのか分からない。（＊）
自分には目標というものがない。（＊）

・充実感　8項目

生活がすごく楽しいと感じる。
わだかまりがなく、スカッとしている。
充実感を感じる。
精神的に楽な気分である。
自分の好きなことがやれていると思える。
自分はのびのびと生きていると感じる。
満足感がもてない。（＊）
こころから楽しいと思える日がない。（＊）

B　対他者領域

・自己閉鎖性・人間不信　8項目

他人との間に壁をつくっている。
人間関係をわずらわしいと感じる。
自分は他人に対してこころを閉ざしているような気がする。
自分はひとりぼっちだと感じる。
私は人を信用していない。
友だちと一緒にいてもどこかさびしく悲しい。
友人と話していても全然通じないので絶望している。
他人に対して好意的になれない。

・自己表明・対人的積極性　7項目

相手に気を配りながらも自分の言いたいことを言うことができる。
自分のなっとくのいくまで相手と話し合うようにしている。
疑問だと感じたらそれを堂々と言える。
友だちと真剣に話し合う。
人前でもこだわりなく自由に感じたままを言うことができる。

人前でもありのままの自分を出せる。
自主的に友人に話しかけていく。

・被評価意識・対人緊張　7項目
人から何か言われないか、変な目で見られないかと気にしている。
人に対して、自分のイメージを悪くしないかと恐れている。
自分が他人の目にどう映るかを意識すると身動きできなくなる。
他人に自分の良いイメージだけを印象づけようとしている。
無理して人に合わせようとしてきゅうくつな思いをしている。
自分は他人よりおとっているかすぐれているかを気にしている。
人に気をつかいすぎてつかれる。

Ⅱ．自己安定性尺度　4項目

1　あなたの自分自身についての見方はよく変わる方ですか。それとも同じままで変わらない方ですか。
　よく変わる　　ときどき変わる　　あまり変わらない　　変わらない

2　あなたは自分自身についての見方が、以前とは変わっていることに気がついたことがありますか。
　あ　る　　ときどきある　　あまりない　　な　い

3　あなたは自分自身についての考えがすぐに変わることに気がついたことがありますか。
　あ　る　　ときどきある　　あまりない　　な　い

4　ある時には、自分について良い見方をしているが、また別の時には自分について悪い見方をしているようなことがありますか。
　あ　る　　ときどきある　　あまりない　　な　い

Ⅲ．重要な他者からの評価意識（本研究においては、項目1から4までを分析。）

A　重要な他者からの評価意識　7項目

1　父は私のことを，＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿

2　母は私のことを，＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿

3　友だちは私のことを，＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿

4　私のまわりの人たちは私のことを，＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿

5　私が気になっている人は，＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿です。
　その人は私のことを，＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿

6　私の尊敬している人は，＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿です。
　その人は私のことを，＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿

7　私のことを一番知っている人は，＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿です。
　その人は私のことを，＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿

B　自己評価の規定因（ダミー項目）5項目

8　私が誇りに思うのは，＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿

＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿

9　自　信＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿

＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿

10　他人の評価＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿

＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿

11　よく私は，＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿

＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿

12　自分のことをだめだなと思うのは，＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿

＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿

付表2－1　重要な他者からの評価の評定結果からみた自己意識尺度得点の平均および標準偏差（全体）

自己意識			SACC		SACT		SOF		SCL		SEXP		SEV		SST	
重要な他者		N	MEAN	SD	MEAN	SD	MEAN	SD	MEAN	SD	MEAN	SD	MEAN	SD	MEAN	SD
S1	S2															
1	1	168	16.85	2.44	24.24	5.85	28.33	6.38	15.68	5.69	24.81	5.34	19.04	6.21	10.39	2.44
1	2	15	17.07	2.31	25.87	5.18	29.13	5.57	14.80	4.69	25.80	5.71	18.40	4.91	11.13	2.47
2	1	150	16.22	3.01	21.01	6.50	23.67	7.40	20.96	7.95	22.20	6.16	21.96	6.90	11.54	2.45
2	2	33	15.82	3.50	22.42	5.76	22.24	8.14	21.45	6.94	21.82	5.60	24.03	6.91	11.45	2.17
3	1	89	15.87	2.84	21.96	5.79	24.49	7.03	18.21	6.34	22.15	5.21	19.58	6.04	10.78	2.61
3	2	124	15.39	2.83	22.43	5.52	25.16	6.22	18.41	6.38	22.91	5.40	21.71	5.91	10.81	2.73
4	1	40	16.18	2.93	24.28	6.70	26.85	7.66	18.18	7.46	24.90	5.67	19.68	7.66	10.63	2.12
4	2	4	19.00	1.41	22.50	2.08	26.50	4.65	15.50	3.51	24.50	3.79	23.00	4.08	9.00	0.82
S3	S4															
1	1	129	17.11	2.44	24.44	5.79	28.41	6.76	16.20	6.44	25.12	5.59	18.83	6.05	10.48	2.43
1	2	14	16.93	2.67	23.57	6.62	23.93	7.12	17.57	7.35	24.64	5.79	20.07	6.93	10.43	2.62
2	1	131	16.37	2.99	22.32	7.21	24.40	7.97	20.55	8.47	23.02	6.48	21.79	7.33	11.50	2.59
2	2	40	15.60	2.54	21.45	4.22	23.15	6.29	19.43	4.82	21.90	5.07	23.40	6.13	11.29	2.10
3	1	111	15.75	2.93	22.06	6.53	25.25	7.52	18.37	6.41	22.68	5.57	19.91	6.00	10.59	2.43
3	2	153	15.80	2.85	22.55	5.25	25.72	6.02	17.73	6.31	22.44	5.03	20.81	6.04	10.71	2.66
4	1	40	15.83	3.14	21.55	5.66	24.33	6.85	18.38	6.64	24.28	5.52	21.83	7.45	11.48	2.29
4	2	5	14.80	2.77	24.40	2.79	25.00	5.96	22.20	7.66	22.80	3.70	21.60	7.50	10.60	2.88
S5	S6															
1	1	267	16.44	2.68	23.89	5.98	27.03	6.72	17.49	6.54	23.81	5.42	20.44	6.30	10.77	2.43
1	2	10	17.00	3.33	19.40	8.02	22.50	10.18	17.40	6.35	22.90	7.65	19.50	10.02	10.20	3.37
2	1	176	15.89	3.12	21.28	6.14	23.97	7.24	19.65	7.63	22.89	6.09	21.35	6.56	11.30	2.34
2	2	14	15.86	2.57	20.79	5.60	22.93	8.62	20.50	7.75	22.79	7.58	22.36	5.88	13.07	2.40
3	1	78	15.95	2.75	23.00	5.68	26.73	6.86	17.10	6.77	22.60	5.02	18.67	6.16	9.92	3.08
3	2	36	15.75	3.03	20.83	5.71	23.17	6.99	19.03	7.04	21.72	5.83	22.39	6.34	10.64	1.97
4	1	42	16.57	2.67	23.69	5.61	25.24	6.32	18.93	6.07	24.55	5.23	21.19	7.56	11.29	2.24
S7	S8															
1	1	239	16.54	2.67	24.14	5.91	26.93	6.68	17.23	6.35	24.15	5.23	20.54	6.13	10.85	2.27
1	2	11	17.18	3.43	19.18	8.18	24.09	10.21	16.36	6.41	22.36	7.43	18.64	9.33	8.64	2.34
2	1	177	15.82	3.02	21.21	6.12	24.09	7.02	19.86	7.60	22.63	6.16	21.03	6.72	11.24	2.51
2	2	13	15.23	2.98	20.38	6.16	19.00	7.56	23.54	7.52	19.46	6.05	23.08	6.30	12.08	2.84
3	1	90	16.37	2.52	23.28	5.91	26.87	7.08	16.72	6.48	23.31	5.36	18.79	6.30	10.51	3.16
3	2	50	15.70	2.77	21.38	4.66	24.12	6.09	19.48	6.72	21.84	5.02	22.66	6.15	10.64	2.06
4	1	40	16.10	3.46	23.15	6.42	25.98	8.00	18.90	6.94	24.18	6.05	21.58	7.48	10.90	2.57
4	2	3	14.00	3.46	19.67	2.52	27.67	5.51	15.67	6.66	25.67	8.50	17.67	9.45	11.33	0.58

注）自己意識の省略記号は，次のものを示している。SACC：自己受容，SACT：自己実現的態度，SOF：充実感，SCL：自己閉鎖性・人間不信，
SEXP：自己表明・対人的積極性、SEV：被評価意識・対人緊張，SST：自己安定性。
重要な他者からの評価についての省略記号は、次のものを示している。
S1・S3・S5・S7は，順に「友人」「人々」「母親」「父親」の各項目の評価次元を表す（1：肯定，2：否定，3：客観中立，4：両価性）。また，
S2・S4・S6・S8は，順に「友人」「人々」「母親」「父親」の各項目の明瞭性次元を表す（1：明瞭，2：不明瞭）。

付表２－２　重要な他者からの評価の評定結果からみた自己意識尺度得点の平均および標準偏差　（中学生）

自己意識			SACC		SACT		SOF		SCL		SEXP		SEV		SST	
重要な他者		N	MEAN	SD	MEAN	SD	MEAN	SD	MEAN	SD	MEAN	SD	MEAN	SD	MEAN	SD
S1	S2															
1	1	48	16.94	2.66	25.48	5.73	30.23	6.62	14.94	5.92	25.98	5.42	17.60	6.57	10.15	2.95
1	2	1	15.00	—	22.00	—	27.00	—	10.00	—	28.00	—	20.00	—	9.00	—
2	1	24	15.63	2.75	20.00	7.38	20.21	8.43	22.88	7.57	20.50	6.57	24.29	6.96	11.20	2.75
2	2	12	16.17	3.43	23.25	4.29	24.00	7.82	18.17	6.77	22.17	5.80	22.33	6.75	11.00	2.89
3	1	27	16.11	3.17	24.07	6.27	27.44	7.64	14.81	5.31	23.74	5.92	17.52	6.17	9.85	2.81
3	2	37	15.11	3.21	23.73	5.39	27.30	6.17	16.84	5.41	23.19	5.55	20.76	7.00	10.22	2.73
4	1	13	16.00	3.00	26.15	5.70	30.15	7.64	15.23	9.27	25.69	5.25	16.61	6.93	9.77	1.74
S3	S4															
1	1	30	16.90	2.82	25.33	6.48	30.67	7.00	13.73	6.57	25.93	5.76	16.47	5.85	9.47	2.57
1	2	3	17.00	4.36	22.00	10.54	26.33	9.50	14.67	5.69	27.67	4.16	16.00	8.19	7.67	2.89
2	1	24	16.46	2.99	22.25	8.79	22.83	10.73	20.08	8.44	23.04	7.65	22.79	7.99	11.63	2.79
2	2	11	15.09	3.36	21.36	3.91	22.73	7.64	21.45	4.82	18.45	4.01	24.55	6.04	11.45	2.25
3	1	38	16.34	2.69	24.74	6.03	28.05	7.28	16.68	6.36	24.26	5.29	19.11	7.00	10.03	2.95
3	2	47	15.34	3.13	24.06	4.45	27.53	5.78	15.64	5.96	23.21	5.37	19.70	6.68	10.19	2.70
4	1	9	15.33	3.08	22.89	4.14	26.33	7.03	19.11	6.33	26.22	5.52	18.00	6.67	10.67	1.66
S5	S6															
1	1	77	16.25	2.87	24.92	6.18	28.71	7.05	16.43	7.10	24.32	6.05	19.42	6.84	10.55	2.29
1	2	3	18.33	2.08	23.33	10.69	30.67	9.50	13.67	8.14	23.00	12.00	11.33	6.66	6.33	2.57
2	1	39	15.56	3.58	22.36	5.86	24.23	9.00	18.72	6.93	23.54	6.02	20.23	7.34	10.85	2.78
2	2	2	15.00	4.24	20.50	0.71	33.50	4.95	13.50	7.78	24.00	11.31	18.00	11.31	15.00	0.00
3	1	26	15.81	2.84	24.54	6.13	28.65	6.49	14.69	5.63	23.81	5.11	17.88	6.41	8.88	3.37
3	2	11	15.91	2.63	21.36	5.28	20.91	5.39	18.64	6.12	21.45	5.80	24.18	6.71	10.36	1.80
4	1	4	17.50	0.58	24.25	5.32	26.00	9.49	16.25	7.41	25.75	3.50	22.00	8.52	9.75	3.59
S7	S8															
1	1	65	16.31	2.99	25.45	6.40	29.20	7.36	16.09	6.97	24.80	5.36	19.15	6.70	10.78	2.23
1	2	3	18.60	1.52	21.40	9.24	29.00	7.11	13.60	5.77	23.80	9.55	11.20	4.71	7.00	2.00
2	1	46	15.54	3.30	21.57	5.88	24.46	8.15	17.37	6.97	23.04	6.71	19.91	6.69	10.70	2.83
2	2	1	12.00	—	21.00	—	30.00	—	19.00	—	16.00	—	26.00	—	15.00	—
3	1	20	16.75	2.65	26.15	5.11	30.50	7.70	15.35	6.56	26.00	4.86	18.70	7.79	9.35	3.91
3	2	15	15.40	2.75	22.53	4.34	22.00	5.59	19.47	6.19	21.47	4.55	23.87	7.11	9.80	1.86
4	1	10	15.30	2.41	23.70	4.22	25.60	5.82	18.40	7.37	21.70	6.25	19.80	7.63	9.10	2.47

付表２－３　重要な他者からの評価の評定結果からみた自己意識尺度得点の平均および標準偏差（高校生）

自己意識			SACC		SACT		SOF		SCL		SEXP		SEV		SST	
重要な他者		N	MEAN	SD	MEAN	SD	MEAN	SD	MEAN	SD	MEAN	SD	MEAN	SD	MEAN	SD
S1	S2															
1	1	45	16.71	2.43	22.89	5.87	27.58	6.47	17.24	6.09	23.93	5.38	20.04	6.67	10.13	2.08
1	2	2	18.00	2.83	27.50	7.78	31.00	2.83	13.50	0.71	21.00	1.41	20.00	8.49	13.50	3.54
2	1	41	16.54	3.26	21.22	6.54	23.78	6.88	22.59	9.36	22.59	6.48	21.44	7.05	11.37	2.51
2	2	13	15.00	3.96	21.54	7.62	17.31	6.96	25.54	5.53	20.15	5.79	27.77	4.85	11.62	2.02
3	1	31	15.45	2.91	19.58	5.06	22.52	5.94	21.35	6.27	20.97	4.88	20.87	6.05	10.48	2.57
3	2	47	15.77	2.46	22.55	5.29	24.79	5.62	18.66	6.85	22.94	5.36	21.83	4.89	10.89	3.05
4	1	7	14.43	3.26	20.14	5.76	23.00	5.94	22.71	6.21	22.57	4.12	24.86	8.91	11.57	1.72
4	2	1	20.00	—	20.00	—	25.00	—	19.00	—	30.00	—	26.00	—	9.00	—
S3	S4															
1	1	28	17.04	2.38	23.32	5.40	28.14	6.71	17.96	7.71	24.43	5.74	18.89	7.29	9.89	2.44
2	1	47	16.47	3.12	22.38	6.91	24.40	6.92	22.02	9.19	23.17	6.57	21.85	7.42	11.40	2.67
2	2	12	15.67	1.37	21.58	5.11	21.17	6.34	19.92	4.40	22.42	4.17	25.00	6.02	10.92	1.83
3	1	33	15.36	3.40	19.00	6.38	22.27	6.97	21.27	6.76	21.27	5.75	21.27	5.29	10.94	2.12
3	2	55	16.04	2.69	22.64	4.80	25.27	5.48	19.00	5.99	22.15	4.87	21.76	5.06	10.69	2.88
4	1	11	14.64	3.35	18.55	5.13	20.18	6.15	20.09	8.23	22.09	4.37	25.18	7.52	11.36	2.25
4	2	1	13.00	—	23.00	—	16.00	—	33.00	—	18.00	—	23.00	—	9.00	—
S5	S6															
1	1	65	16.54	2.66	22.88	5.90	26.09	6.15	18.65	6.81	23.91	4.77	21.97	6.24	10.37	2.34
1	2	2	16.50	4.95	14.50	7.78	13.00	2.83	18.00	4.24	22.00	9.90	15.00	11.31	10.50	0.71
2	1	53	15.74	3.21	20.49	6.08	23.47	6.57	22.72	8.26	22.11	6.46	22.68	6.67	11.28	2.63
2	2	9	15.67	2.65	21.11	6.62	19.33	7.78	24.11	6.70	20.33	6.96	23.67	5.15	12.67	2.24
3	1	32	15.63	2.77	22.22	4.77	24.16	6.25	19.59	7.29	20.97	3.61	19.59	4.96	10.38	3.02
3	2	13	15.38	3.31	21.46	6.04	24.15	7.01	17.92	7.70	21.92	7.01	22.38	5.36	10.85	1.63
4	1	13	16.85	2.85	21.62	6.98	25.00	7.63	19.15	5.57	24.15	5.81	20.31	9.54	11.31	2.63
S7	S8															
1	1	57	16.56	2.65	24.00	5.72	26.07	5.95	18.93	6.13	24.25	5.01	23.07	5.75	10.32	2.15
1	2	2	13.50	0.71	12.00	4.24	14.00	4.24	20.00	7.07	17.50	3.54	23.50	0.71	9.50	0.71
2	1	59	16.24	3.01	20.46	6.41	23.14	6.38	22.49	8.11	22.19	6.35	20.80	7.18	11.39	2.53
2	2	7	15.57	2.82	22.43	6.97	19.29	8.16	24.00	7.72	20.57	7.98	25.00	4.80	12.57	2.51
3	1	35	15.86	2.44	22.06	4.43	25.63	6.14	17.91	7.14	21.34	4.09	19.26	4.95	10.26	3.24
3	2	18	15.83	3.15	20.83	5.02	25.50	6.04	18.67	7.66	22.06	5.76	22.11	5.96	10.78	1.63
4	1	9	13.78	4.47	17.78	5.21	20.22	10.31	22.33	8.08	23.22	5.21	24.33	9.81	11.89	2.85

付表2－4　重要な他者からの評価の評定結果からみた自己意識尺度得点の平均および標準偏差　（大学生）

自己意識			SACC		SACT		SOF		SCL		SEXP		SEV		SST	
重要な他者		N	MEAN	SD	MEAN	SD	MEAN	SD	MEAN	SD	MEAN	SD	MEAN	SD	MEAN	SD
S1	S2															
1	1	75	16.88	2.33	24.27	5.82	27.57	6.00	15.23	5.17	24.59	5.21	19.35	5.58	10.69	2.28
1	2	12	17.08	2.35	25.92	5.18	29.00	6.13	15.42	5.02	26.42	6.02	18.00	4.82	10.92	2.27
2	1	85	16.24	2.96	21.19	6.28	24.59	7.14	19.64	7.12	22.49	5.88	21.55	6.75	11.72	2.35
2	2	8	16.63	2.88	22.63	4.50	27.63	6.37	19.75	6.54	24.00	4.72	20.50	7.82	11.88	0.83
3	1	31	16.06	2.50	22.48	5.35	23.90	6.85	18.03	5.79	21.94	4.67	20.10	5.60	11.87	2.11
3	2	40	15.20	2.89	21.08	5.73	23.58	6.52	19.58	6.50	22.63	5.43	22.45	5.95	11.25	2.27
4	1	20	16.90	2.61	24.50	7.24	26.05	7.68	18.50	5.85	25.20	6.38	19.85	6.97	10.85	2.35
4	2	3	18.67	1.53	23.33	1.53	27.00	5.57	14.33	3.21	22.67	1.15	22.00	4.36	9.00	1.00
S3	S4															
1	1	71	17.23	2.31	24.51	5.63	27.56	6.55	16.55	5.58	25.04	5.49	19.80	5.37	11.14	2.18
1	2	11	16.91	2.34	24.00	5.81	23.27	6.75	18.36	7.78	23.82	6.05	21.18	6.54	11.18	2.09
2	1	60	16.25	2.93	22.30	6.88	25.03	7.51	19.58	7.85	22.88	6.01	21.33	7.07	11.52	2.49
2	2	17	15.88	2.67	21.41	4.00	24.82	5.14	17.76	4.78	23.76	5.36	21.53	6.11	11.41	2.27
3	1	40	15.50	2.72	22.05	6.11	25.05	7.35	17.58	5.42	22.33	5.44	19.55	5.45	10.83	2.06
3	2	51	15.98	2.77	21.06	6.00	24.53	6.49	18.27	6.61	22.04	4.89	20.80	6.34	11.22	2.30
4	1	20	16.70	2.92	22.60	6.12	25.70	6.46	17.10	5.86	24.60	5.92	21.70	7.21	11.90	2.53
4	2	4	15.25	2.99	24.75	3.10	27.25	3.69	19.50	5.45	24.00	2.94	21.25	8.62	11.00	3.16
S5	S6															
1	1	125	16.50	2.58	23.78	5.83	26.47	6.66	17.54	5.95	23.45	5.35	20.27	5.87	11.12	2.52
1	2	5	16.40	3.85	19.00	6.96	21.40	9.45	19.40	6.11	23.20	5.89	26.20	7.46	12.40	2.07
2	1	84	16.14	2.85	21.29	6.31	24.15	6.78	18.14	7.03	23.08	5.91	21.04	6.04	11.52	1.89
2	2	3	17.00	1.73	20.00	5.20	26.67	6.11	14.33	4.04	29.33	4.73	21.33	5.13	13.00	3.61
3	1	20	16.65	2.62	22.25	6.26	28.35	7.23	16.25	6.17	23.65	6.25	18.20	7.55	10.55	2.50
3	2	12	16.00	3.28	19.67	6.05	24.17	8.26	20.58	7.39	21.75	4.90	20.75	7.05	10.67	2.53
4	1	25	16.28	2.79	24.68	4.74	25.24	5.27	19.24	6.27	24.26	5.28	21.52	6.51	11.52	1.76
S7	S8															
1	1	117	16.66	2.49	23.48	5.65	26.09	6.38	17.03	5.97	23.75	5.26	20.07	5.64	11.14	2.33
1	2	4	17.25	4.86	20.00	7.75	23.00	12.83	18.00	7.12	23.00	6.22	25.50	9.47	10.25	2.06
2	1	72	15.67	2.84	21.60	6.06	24.64	6.76	19.31	6.96	22.72	5.67	21.93	6.29	11.46	2.25
2	2	2	15.40	3.44	17.40	4.72	16.40	5.73	23.80	8.64	18.60	2.88	19.80	7.92	10.80	3.19
3	1	35	16.66	2.53	22.86	7.10	26.03	7.10	16.31	5.67	23.74	6.07	18.37	6.72	11.43	2.33
3	2	17	15.82	2.51	20.94	4.63	24.53	6.39	20.35	6.38	21.94	4.87	22.18	5.64	11.24	2.46
4	1	21	17.48	2.82	25.19	6.62	28.62	6.70	17.67	6.03	25.76	6.07	21.24	6.27	11.33	2.15
4	2	3	14.00	3.46	19.67	2.52	27.67	5.51	15.67	6.66	25.67	8.50	17.67	9.45	11.33	0.58